

令和5年度～令和7年度

こどもの発達を支える生徒指導に関する調査研究事業

# こどもを主語にした こども主体の

魅

力

あ

る

学

校

づ

く

り



「こどもの発達事業を支える生徒指導に関する調査研究事業」とは…

不登校児童生徒数は、全国的に増加傾向が続いており、美祢市においてもその増加は喫緊の課題となっています。各学校では、不登校児童生徒の実態把握に努め、傾向が表れた段階から各関係機関と連携しながら丁寧かつきめ細やかな対応を進めてきました。しかしながら、これは不登校の状態にある児童生徒への支援が中心であり、不登校児童生徒への個別の対応に重点が置かれていました。不登校児童生徒を減らすためには、個別の対応を大切にしつつも、すべての児童生徒を対象にした指導の充実が求められます。現在登校している子どもたちが「学校が楽しい」「授業がよくわかる」「学校に行きたい」と感じて登校し続けられる、新たな不登校を生まない取組、つまり、『魅力ある学校づくり』が必要です。

美祢市では、国立教育政策研究所の委託を受け、本事業を通して「こどもを主語にした・こども主体の魅力ある学校づくり」、いわゆる「ウェルビーイングな学校づくり」をめざし、令和5年度から令和7年度までの3年間、美祢市立大嶺中学校区(大嶺中学校、大嶺小学校、麦川小学校、於福小学校、豊田前小学校)をモデル校区として研究を進めました。



美祢市教育委員会  
〒759-2292 山口県美祢市大嶺町東分326-1  
tel.0837-52-1118

山口県美祢市 令和8年1月

本パンフレットの  
ダウンロードはこちら→





## “こどものことはこどもに聞いてみる”

### 大事にしたい「発達支持的生徒指導」 「させる生徒指導」から「支える生徒指導へ」

生徒指導を生徒指導主任のみならず、「全教職員で行っている」という意識が重要です。

「発達支持的生徒指導」の「発達支持的」というのは、児童生徒に向き合う際の教職員の基本的な立ち位置を示しています。すなわち、あくまでも児童生徒が自発的・主体的に自らを発達させていくことが尊重され、その発達の過程を学校や教職員がいかん支えていくかという視点です。この視点から、教職員は、児童生徒の「個性を発見し、よさや可能性を伸ばし、社会的資質・能力の発達を支える」ように働きかけます。

「発達支持的生徒指導」では、日々の教職員の児童生徒への挨拶、声かけ、励まし、賞賛、対話、及び、授業や行事等を通じた個と集団への働きかけが大切です。例えば、「自己効力感」「コミュニケーション力」「他者理解力」「思いやり」「協働性」「課題解決力」などを含む社会的資質・能力の育成、自己の将来をデザインするキャリア教育、共生社会の一員となるための市民性教育・人権教育の推進など、日常的な教育活動を通して、学習指導とも関連付けながら、全ての児童生徒の発達を支える働きかけを行います。



## “居場所づくり・絆づくり”

### こどもたちへの教職員のかかわり方を振り返る 「生徒指導の実践上の4つの視点」

文部科学省委託事業『不登校の要因分析に関する調査研究報告書（令和6年3月公表 公益社団法人子どもの発達科学研究所 他）』では、不登校の理由としての児童生徒の回答を見ると、令和4年度の不登校の児童生徒からは「先生から厳しく怒られた・体罰」との回答が16.7%、「先生と合わなかった」が35.9%となっており、教職員の態度や指導方法が不登校の要因になっている可能性が示唆されています。また、児童生徒回答・教師回答ともに、不登校リスクを高める要因となっているのは、「学校の決まり」への不適応でした。これらは、他の児童生徒と同じ制服を着ること、同じように給食を食べること、同じように行事に参加しなければならないことへの違和感であり、多様性を重んじる今の時代に反して（少しずつ変わってはきたものの）、画一的なルールや活動、枠組みの中で児童生徒を受け入れるしかない学校の問題を示唆していると思われます。

なお、こうした学校のルールや活動の設定、教職員の態度や指導の仕方は、学校風土を形作る要素です。学校風土の向上は、不登校の予防につながるものであり、学校風土の見える化、校則等の見直しの推進、快適で温かみのある学校としての環境整備が大切です。

そこで、生徒指導提要の『生徒指導の実践上の4つの視点』をもとに、教職員の日々の教育活動を振り返っていく必要があります。

大嶺中学校区の実践イメージ

『生徒指導の実践上の4つの視点』…「生徒指導提要より」

美称を語り、夢を語る地域の担い手の育成と豊かな地域づくりをめざして

- 1 「自己存在感の感受」  
一人ひとりの児童生徒をかけがえのない存在と捉え、個性や独自性を大切にする
- 2 「共感的な人間関係の育成」  
自他の個性を尊重し、相手の立場に立って考え、行動できる協力的な人間関係を学級の内外に築く
- 3 「自己決定の場の提供」  
自ら考え、選択し、決定し、行動する(発表・制作など)経験が得られる機会を意図的に設定する
- 4 「安心・安全な風土の醸成」  
お互いの個性や多様性を認め合い、安心して授業を受けられたり学校生活を送ったりすることができる風土をつくる





“こどもの声に耳を傾ける”

## 年3回の意識調査の結果から こどもたちの状況を確認する

### 意識調査（年3回）

#### ア 学校が楽しい

- 1 当てはまる
- 2 どちらかといえば当てはまる
- 3 どちらかといえば 当てはまらない
- 4 当てはまらない

(ア) 学校が楽しい

(イ) みんなで何かするのは楽しい

(ウ) 授業に主体的に取り組んでいる

(エ) 授業がよくわかる

1人1台端末を使用して、4つの項目について調査を行います。  
（「1 当てはまる」の数値に着目します。）

「意識調査」の結果は児童生徒からのメッセージです。結果から、こどもたちが実際にどのように感じているのかを考えます。そして、仮説を立て、こどもたちへの関わり方を教職員側が見直すことが重要です。



（例）ある小学校で、こどもを主語にしたいろいろな実践を展開していたのですが、2学期末の高学年の意識調査の結果に低下が見られました。

そこで、「もしかしたら、いろいろとやりすぎてこどもが疲れているかも」、「達成感につながっていないのかも」という仮説をもちました。

2学期の結果を受けて、こどもたちの目線に立ち戻って、計画の見直しや事後指導の充実に向けて改善の手立てを協議し、共有する場を設けました。そして、「高学年のこどもたちの頑張りが他の学年に届いていること」をしっかりと伝えていったそうです。その後、3学期には数値が上昇しました。

【2学期末意識調査】	6年生（当てはまる）
学校が楽しい	20%
みんなで何かするのは楽しい	60%



【3学期末意識調査】	6年生（当てはまる）
学校が楽しい	60% ↑
みんなで何かするのは楽しい	80% ↑

教育活動が教職員の独断的なものにならないよう、こどもたちの本当の声に耳を傾ける教職員の姿勢・立ち位置が重要です。

“「なぜ不登校になるのか」に加え、「どうして学校に来るのが（学校魅力）」という問いの追加を”

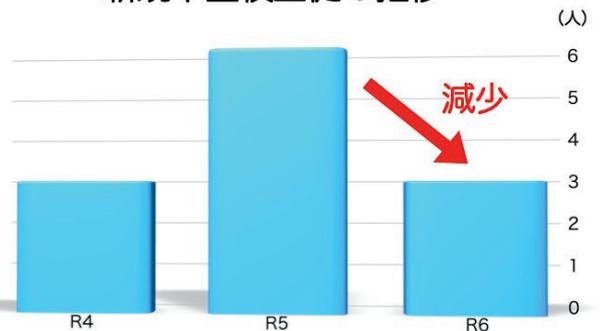


## 不登校対策…「新規数」出現の抑制をめざす

不登校児童生徒数を抑制するためには、不登校児童生徒を学校復帰等に繋げるための支援（教育支援センターや校内教育支援センターなどの受け皿の整備）も必要ですが、学校から新規の不登校を生まないことがもっとも重要です。

そのためには、こどもたちにとって学校が来たい場所になることが肝要です。学校が「居場所」となり、「絆」をつくることのできる場所になるよう、教職員が、真にこどもたちにとって魅力のある学校づくりを行うことで「新規数」出現の抑制をめざします。

### 新規不登校生徒の推移





## こどもを主語にした こども主体の

## モデル校区の特徴のある取組

### 大嶺中学校 「生徒による主体的な行事企画」



令和6年度生徒総会で多くの賛同を得た「防災」企画を、プロジェクトチームを中心に一から計画。生徒たちが市の防災アドバイザーと打ち合わせを重ね、消防署の全面協力の下、全校生徒約200名が3つのグループに分かれ、体験型防災学習に臨みました。令和7年度は、「地域」と共に第2弾を実施。PTA主催「ゆめサボフェスタ」の中で、地域の方々とハザードマップ作成やバケツリレーなどの企画を実現しました。

### 大嶺中学校 「ルールメイキング」



令和7年度生徒会スローガン「繋がる～Take action～」を掲げ、今後の大嶺中学校をどう盛り上げていくか、生徒自ら生徒会組織を再考しました。地域の少子化が進む中、将来、持続可能な生徒会運営を行うべく、生徒会役員の編成方法や選挙の内容を大幅に改善するために第2回生徒総会を開催。全校生徒による討議・質疑応答を経て、生徒会規約の改正を実現しました。

### 豊田前小学校 「掃除場所の自己選択・自己決定」



いつも行っている掃除を「させられる」ものから変え、縦割り班で相談して自分たちで掃除が必要な場所を決めて行うようにしました。

自分たちで、日頃掃除が行き届いていない場所を考えて掃除。「次はどこをしたい！」と相談したり、いつもより熱心に掃除を行う様子が見られたりしました。

### 麦川小学校 「地域を巻き込んで開催『ハロウィン集会』」



「今年は、地域の皆さんも楽しめるハロウィン集会をしてみたい。」という児童の願いから、全校8名が協力して英語を使ったゲームを創作し、ルールを工夫したり、6年生が作成した案内チラシを配布して地域へ呼びかけたりしました。当日は、児童が主体となって進行し、保育園児をはじめ保護者・地域の方も大いに盛り上がりました。自分たちの思いや願いを、地域を巻き込みながら形にしていける力は、わくわく感あふれる学校づくりにつながっています。意識調査「学校が楽しい」「みんなで何かをするのが楽しい」の結果は、100%の積極的肯定になりました。

### 於福小学校 「於福小わくわくプロジェクト」



「ふるさと於福をもっともりあげたい！」という児童の思いから、発案したプロジェクト。プロジェクトを進行する中で、たくさんの人に於福のよさを知ってもらうために、「於福わくわく夢マラソン」というイベントを開催。

様々な地域の方の協力をいただきながら、児童が主体となってイベントの内容を考えたり、於福じまんマップの作成をしたりしました。中でも、『ゼッケンくじ』は「走ることが苦手な人でもマラソンを楽しんでほしい。」という児童の思いが詰まっています。イベント当日は約100人の参加者が集まり、たくさんの人と一緒にふるさと於福のよさを感じながら大会を開催することができました。児童は、「このイベントは全部、於福の人たちの協力があったことだと分かった。地域の人、家族に勇気をもらっている。」と振り返り、周囲の人の存在や協働することの大切さ、自分たちが大切にされているという実感をもつことができました。

### 大嶺小学校 「こどもの思いを生かして『6年生を送る会』を見直す」



例年、各学年から6年生に向けた出し物を実施していましたが、5年生に会の在り方を任せ、6年生と各学年との対決方式に。

自分たちの考えから企画がスタートしているため、児童一人ひとりが責任をもってやり遂げる姿が見られました。今までは教師から与えられた枠の中で行っていたものが、自分たちの考えて行事をつくることのできるという経験を味わうことができました。会を運営した5年生は、「学校は楽しいですか?」「みんなで何かをするのは楽しいですか?」の項目で、10ポイント以上の意識調査の上昇が見られました。